

パラアート（障がい者アート）を商品化し、生きがいと社会参加の意欲を喚起する。

福祉は医療、施設、生活援助一辺倒だけではなく、文化的であるべきだという提言のもと、新しい福祉づくりに情熱を燃やして、1966年にスタートした「財団法人日本チャリティ協会」。事業の一環として力を注ぐ「パラアート（障がい者アート）」の育成と発展が、新たな段階に向けて一歩、足を踏み出した。

商品化により、障がい者にさらなる生きがいを。

芸術、文化、スポーツ、レクリエーションなどを通じて、障がい者（児）や高齢者が生きがいを感じながら社会参加できる環境の整備に力を入れてきた財団法人日本チャリティ協会。年間、数多くの事業を運営・推進しているが、そのひとつがパラアート（障がい者アート）の育成と発展

である。パラアートとは、2009年に開催された「2009アジア・パラアートTOKYO」の際に生まれた造語で、パラリンピックのパラを敷衍し、障がい者によるアートを新しいアートの潮流として位置づけ、一般に認知させていこうという願いを込めた言葉である。

2009アジア・パラアートTOKYOの開催にあたってAJOSCの助成が活用されたが、今回再び、パラアートの普及・啓蒙に助成が役立つことになった。それがパラアート作品をデザイン化したり、モチーフにした商品を開発するための調査・研究である。理事長の高木金次さんは、その意図を次のように語る。

「障がい者の生きがいをより高めるとともに、彼ら、彼女らが持っている才能を社会的に活用していただきたい。それがひいては、厳しい雇用情勢に置かれている障がい者自身の就労機会に少しでもつながることを期待してい



パラアート工房作品展示会のチラシ



会場では、生活雑貨からインテリア用品まで多彩な試作品が並んだ



試作品は現代アートをモチーフにした商品として十分、通用する可能性がある



どれも自閉症や発達障がいの人が持ち合わせている美的センスを強く感じる

ます」

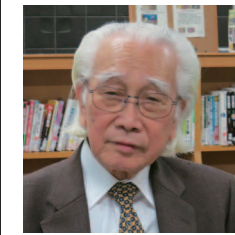
商品化とは、あくまでも一般消費者を購買ターゲットに想定し、通常の流通ルートに乗るものを開発するということである。職業訓練などをかねた、いわゆる授産商品ではない。そのため、日本チャリティ協会では、商工会議所、大手百貨店、デザイナー、美術雑誌などの関係者から成るパラアート工房委員会を開催し、商品化や流通にあたって、どんなポイントを考えなければならないのかヒアリングを行った。「アートとしての価値があるものは当然ですが、さらに消費者の購買意欲を刺激する、商品としての魅力を持ったものでなくてはなりません。そのために、どんな作家の、どんな作品を選んで、どんな商品に展開していくのがふさわしいのか、いろいろと検討を重ねました」と、ディレクターの瀬川乙女さんは話す。

パラアート作品を集めた展示会を開催。

商品化にあたってのものととなる作品は、協会が1986年から実施している障がい者のカルチャースクール（2000年まで東京都主催・日本チャリティ協会運営、2001年以降は協会主催）で学んだ生徒さんのものを中心に、全国のパラアート作家のものが選ばれた。

その試作品が次々と完成しつつある段階だが、それらを多数集めた作品展示会が、2012年6月に新宿中央公園

担当者より



今後も継続的なバックアップをお願いいたします。

財団法人日本チャリティ協会
 理事長
 高木金次さん

これからの福祉を考える場合、さらに「文化」の側面を押し出していくことが大切だと思います。日本がリーダーとなって、中国、韓国などのアジアの障がい者と手を携えることも重要。そうした文化振興のためにも、AJOSCの助成には大変、感謝しています。

内にあるエコギャラリー新宿で開催された。会場には、Tシャツ、ブルゾン、ベビーシャツ、エプロン、ランチョンマット、トートバッグ、ブックカバー、マグカップ、タンブラー、皿、掛け時計、うちわ、iPhoneカバー、ノートパソコンの天板、ジグソーパズルなど、生活雑貨からインテリア用品まで、実に多彩な試作品が並んだ。

緻密な構成や独特の色彩感覚など自閉症や発達障がいの一部の人が持ち合わせているとされる美的センスを強く感じさせるものもあるが、その多くはパラアートという前提なしでも、現代アートをモチーフにした商品として十分、通用する可能性がある。「障がい者の作品ということを出すのではなく、それはむしろ一歩後ろに下げて、一般の商品として市場で受け入れられるだけの価値や魅力があるかということを第一に考えました。本当の意味でのノーマライズを達成するためにも、それは避けて通れない道だと思います」と、瀬川さん。

今回の展示会は障がい者のカルチャースクールの26期作品展「遊〜夢」と同時開催となったが、この展示会に刺激を受けた生徒の作品のなかから、商品化につながるものが生まれてくることも期待される。このような展示会や作品展を含め、日本チャリティ協会では「パラアートエキシビション」というコンセプトのもと、今後も機会あるごとにパラアート展を開催し、才能ある優れた作家が国境を越えて集う場を創出していくことを考えている。